



TITLE:

## 三、相模灘津波の側觀面

AUTHOR(S):

伊[藤], 貞市

---

CITATION:

伊[藤], 貞市. 三、相模灘津波の側觀面. 地球 1924, 1(1): 70-72

ISSUE DATE:

1924-02-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182627>

RIGHT:

## 三、相模灘津波の側觀面

伊藤貞市

第一に問題となるのは這般の津波が最初に負の波であつたか正の波であつたかといふ事である。すなはち津波が打寄せることを以て始まつたか、或は一般に津波に就いて、考へてゐた如くやはり引くことを以て始まつたか、これは津波と地震の性質との關係を論ずる際は非考慮に入れなければならぬことと信ずる。この後の問題は私の力以上なる故こゝには論じ得ないが右のやうな事實は、如何であつたかといふことをすこしく書いて參考に資したい。

諸方の檢潮器や又一般の觀察者の談話によると今度の津波もやはり最初は負であつたと思はれるしかしこの問題をより複雑にするものに地震と同時にもしくは従つて起れる土地隆起がある。普通に波が引いたといはれるうちに土地隆起による水面降下を割引しなければならぬ、この誤りから免かれて津波その者について正しい考へを持つには激震地より比較的遠い所従つて土地隆起等によつて水の運動が影響されない所に於ける觀察が必要となる。私達はこの目的のため駿河灣の二三ヶ所に於いて當時の目撃者の話を聞いて見た。即ち焼津・用宗の海岸に於いては、概して云へば引く波を以

て始まり、又引く波の方がより顯著であつたらしい。寄せる波は或は單に元の水位にとゞまると云ひ又満潮面迄達したと云ひ、或は稍々それを越したと云ひ、全く區々として判明せぬ。之に反し引く方の波は大地震後約三十分程で始まり、しかも可なり引いて（推定約三米位）その上引いて暫くそのまゝ持續した形跡がある。之を數回繰返した。處によつては之を以て津波の前兆なりとして高所に避難した。又清水港の檢潮器も記録は不完全であるがその波の異常はやはり最初にひくことを瞭かに示してゐると聞く。

伊豆東海岸に於いては前述の如きファクターが入り来る故、材料の精密な蒐集檢討を必要とするが、私の直接、實見者から何かの事實を聞き出すを得たのは伊東初島熱海及びその以北小田原迄の海岸に過ぎぬ故之を以て全體を推すのは可なり大膽であるが、やはり最初負の波であつたらしい。そして又負の波の方が全體の波の運動のうち優勢の部分をおめたと思はる。ところがこゝに注意すべきは伊東と眞鶴に於いて、最初正の小波（伊東にては最大の正波十二三米に對し二米位眞鶴にては一米半位）を認めたことである。これは單に誤認であるとして除外することが出来ぬと思ふ。之に就いて二様に考へ得られる。

先づ今度の津波を正を以て始まつたものと考へる。そして正の方が負に比し非常に劣勢であつたとする（特にその最初に於いて）。然るときは津波の源點より遠い地方、若しく特殊の地形（例へば

平調な屈曲の少ない處）にては最初の正波はすくなくも人間の注意から逸し去る程度か若しくは全く現れぬのが當然である。伊東眞鶴はその之を現はすを得た地點とする。鎌倉に於いては最初から相當な正の波が來たと傳へられる。しかし之は津波の源點に近かつたのだと考へればよい。

反之伊東眞鶴はその特殊の位置のためかくの如き最初の正波を示したので津波は一般に、負を以て始まつたのだとも考へられる。すなはち當時伊東沖で漁夫が急潮の南下するを認めしことや中村清二博士の大島元村沖にて南北より波浪の衝突したといふ觀察「科學智識」第三卷第十號二〇頁今村博士の記事參照）と伊東眞鶴が東北に面せる灣なる事實とを關聯して考へると右のやうな局部的の波動異常がありさうなことにも思へる。

右のいづれであるか、或は、或所では負を以て始り他の所では正を以て始つたといふ所謂事實其儘を認むべきかは、相模灘の他の部分や、房總に於ける津波發生の時刻、繼起の事實等を是非考慮に入れて判斷すべきであらう。とにかく興味ある問題である。